

---

# 革命ドリーマー

ヒル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

革命ドリーマー

### 【Nコード】

N1318Y

### 【作者名】

ヒル

### 【あらすじ】

思想の貫き通す同士諸君――この腐りきった世界に革命を起こす時が来た。

さあ、思想を貫き通せ、我が道を進め――己の欲望の為に、

――夢追人達よ。

## 革命の序章

外灯の少ない道に一人の息を荒らげた何処かの学生の制服に身を包んだ生徒が走っていた。何かから怯えるように背後を振り返りながら、その目を恐怖に怯えさせ、無我夢中で走っていた。背後には暗闇が少女に詰め寄ろうと近づいてくる。

「ハアハア、誰・・・かぁ、助けてッ！」

少女は息を荒らげそれでも、走り続け、そして行き止まりに辿り着いた。先には工場がありその入口は鉄の網で進めない。ガシャンと飛び付くように網を掴んで、よじ登ろうとするが、それより先に危険な気配を感じて、思わず手を止めてしまった。

「いや・・・」

「いやぁあああああああああああ！！」

「――何にビビってるの？」

誰もいないと思った街外れに少女以外の声が響いた。それは少女にとつて最高に嬉しいことで、時間を止めることによりも助けを求めたいものであった。だが、その声の元を見るとそれは工場から聞こえた。

――それも工場の煙突から一人が座っていた。背後の月をバツクに二ツト帽を被った少女と同じくらいの少年がその光景を見ていた。

「・・・た、助けてッ！」

「助けてもいいけど、質問していい？」

「え・・・？」

意味が理解出来ない少女は啞然としていた。その光景を見た少年は煙突から――重力に吊られるように落ちた。

「あッ！」

「意味が分からなかったかな？じゃあ、最初から言っと、」

「ーえッ!？」

その直後、煙突から落ちたはずの少年は少女の横に立っていた。

「おいらはたまに思うんだけど、君は死ぬのと生きるのどっちがいい？」

食卓というのは、家庭によって違いがあるものだが、僕の家は食卓はとても静かだ。両親共に共働きで朝には二人ともいないトースターにパンを入れて、いい加減に黄金色に焼き目がつくと皿に乗せて、テーブルに座ってテレビを付けた。プラズマテレビが流行る時代で僕の家テレビは今だブラウン管で付けるとぶうんと独特の音を鳴らして、暗い画面から男性のニュースキャスターの声だけが漏れ、すぐに画面が表示される。

『ー市で、昨夜未明、女性と思われる遺体が発見されました。現在、警察による調査が行われている状況です』

いつもと同じ朝で、たわいもないニュースその内容は女性の事故だった。他殺の可能性が高いがそれよりも重要なのは僕の近所だったということだ。近くで起きたということは何時ものニュースよりも興味を唆るものがあるが、それでも僕にはとっては無縁なことだ。右上の時間が7時45分という時間を指しており、そろそろ丁度いい時間だった。食パンを口内に放り込んで、急いで皿を台所に持っていき、鞆を持って家を後にした。

ーそう、それが僕にとっての日常であったし、毎日だった。今日は8月21日。僕の日常の終了を告げている日だった。

平穩とのお別れは単純だ。そう、俺にとって目の前にある扉が開き、助けを乞う声が聞こえればそれはもう俺の平穩は潰され、娯楽の始まりだ。その娯楽に全てを費やすため、退屈を満喫している。それが俺にとっての日課。

「ーそう、扉が開く音と共に俺は目を開けるのだ。」

「依頼です。笹久間ーささくまー冬馬ートウマ様」

俺の身の回りの事をしてくれる専属メイドが行儀がよくお辞儀をして、平坦に要件を告げる。

「今回の依頼は、変死体で見つかった女性の身元及び、犯人の搜索だそうです。どうなされますか？ご主人様？」

笹久間 冬馬と呼ばれた男は机に乗せた足を下ろして、視線をメイドへと向けた。平然と表情一つ動かず、笹久間は笑いながら答えを見せた。

「ツツカ、俺はサツの豚飯は食わない主義なんだけどね・・・ツツカ、今回の餌どう思う？」

「・・・私が判断してもよろしいものかと、思考します」

「構わないよ。俺としては君の意見も聞きたい所なんだ」

すると、ツツカは部屋に入って、扉を締めてその手に持っていたレポートを笹久間の元へと置いた。

「では、私個人が思いますに、今回の事件はきつと笹久間様にとって最高の餌になるかもしれません」

笹久間は置かれたレポートを手にとって、パラパラとその内容に目を通した。内容は警察が調べたもので、遺体八間時の状況が事細かに書かれており、現在の状況まで書かれていた。

「ー確かにこれは、美味しそうだね。だけどこの殺し方、例の件と似ている気がするな」

「ではー戦闘に連絡を入れますか？」

笹久間は視線をレポートに向けたまま全てを見終えると、レポートを机に置き直し、満足げな表情でツツカを見た。

「いや、これは俺にとっての最高の餌だ。食切れる自信はないけど

ツツカ手伝つてくれるかい？」

「はい、ご主人様のお心のままに、」

「君が居てくれるとありがたいよ。じゃあ探偵ドリーマー。餌喰いに行きますか」

「聞いたか？今日のニュース、近所であつたらしいぞ、」

「それがさ、今メールきたんだけど酷いみたいだぞ、警察が沢山つて」

「・・・」

学校に来たのはいいが、やはり今日の話題は今日のニュースのとどつた。充滿したイレギュラーにみんなの興味は完璧に的になっていた。そう言えば、昨日の話題と言えば鉄壁の城塞と有名なクラスの一の美女の鳳葛祇 雅音ーホウカツギ マサネ。だった。確か告白に来た学校での人気も高いイケメン男子の告白を拒否したとか、今まで告白してきた人数は20人を超えるとか。そんな噂だった。

だがそんな噂にしろ、今日のニュースで上書きされた。だからこそ、鳳葛祇は平然と席に座つて今日の授業の用意をしていた。僕は決して友達が多い訳ではない、むしろ少ない。数えられるのは一人くらいか。

「やあ、おはよう。 訳我城 答ーワケガシロ コタエくん」

「うん、政宗くん」

ー ー 中年男性のようにはぶつちやりとした体型の男。汗っかきでいつも小馬鹿にされている彼は毎日のように僕に話かけてくれる。それは何故か？それは多分、僕の不思議な名前が原因だろう。

確かに入学した当初は、訳我城という苗字と答という名前は注目を誘った。だが前の話だ。

今は政宗くんという武将のようなオタクと話せるようにはなつたし、

それでも学校にも満足していた。

「今日は、やけに賑やかですな」

「ニュースだよ。近所での殺人事件」

「殺人って物騒ですな、全くこれだからリアルは・・・」

とブツブツと小声で言う政宗はもう慣れた。

革命の序章（後書き）

まだ続きます

## 革命の序章 2

ー市、11時24分。工場前

笹久間とツツカはおびただしい数の警官の合間を潜って、遺体があった場所に辿りついた。いつもなら形跡と思われしものに番号を振って、管理するものだが、今回それは一つしか無く、遺体のいた場所にはチヨークの跡ではなく赤い×印が書かれていた。

「ツツカ、遺体は確かあの煙突に括り付けられていたんだな？」

「その通りです。煙突に鉄の網で括り付けられていたそうです」

本来は関係者以外辿り付けられないようにさせる為に金網が無残にも根っこから抜かれたように、道路に凹みが出来、コンクリートがめくり上がっている。

「笹久間、よく来たなア」

「警察官A、どうした？何か異変があったか？」

「警察官Aじゃねえよ。餓鬼の会話じゃねえんだから」

チツと舌打ちをすると刑事は懐からタバコを取り出して、一本引き抜いて口に加えた。そこからライターで火をともし、煙を吐いた。

「これはこれは、露理魂病のお父さんじゃないか」

「あのねえ、自分の娘を可愛がる事は普通でしょ」

「ですが、あの可愛がり方は異常のレベルを超えています。私の中で思いつく言語はサイコ」

「ーおいおい、メイドちゃん、失礼すぎるだろ、おっさん傷ついたらわ」

「まあ、そんな前置きはいい。情報を教える刑事A」

「あのねえ、問題は警察か刑事かじゃねえんのよ……。まあいいや、じゃあ今回の事件について纏めたレポートはメイドちゃんから

貰っただろ？」

「ああ、もう読んだ。だが重要な事が抜けているな。死亡推定時刻と詳しい遺体状況について」

ああ、と刑事は言う。タバコを大きく吸って、壁に擦りつけて消して、懐から携帯灰皿を取り出してその中にタバコをいれた。

「その事だが、実際遺体を見てもらった方がはやく、こりゃ、俺にとって初めての猟奇的事件だ」

「ですが、露理魂刑事の専門が猟奇的な事件の担当なのでは？」

「おい、何普通に俺の苗字を露理魂にしてやがる……。担当って言い方は少し可笑しいが、確かに色々な狂かした事件と関わってきたが、今回ばかりは別だ。これは……。人間のやることとは思えない代物だ」

笹久間はそう聞いて、真面目な表情で考えた。これだけ弄っているがこれでも警察の間では有名な刑事として有名な刑事が、ここまでする程の事件だと言うことだ。それは人間のやることではない。つと言った。それほどの事件なのだろう。

「ここにもこれ以上、情報は出ないだろう。露理魂、その場所に連れて行け」

「俺、人生の先輩なんだから、もっと敬意を示せよ」

――市、香山高校12時45分

昼休み、長い授業と眠気と戦いながら、ようやく迎える事のできた30分近い休み時間。僕は今日は弁当の用意はしておらず、学食じゃなくて適当にパンを買って済ませよう。

政宗は文化部の何か忘れたが、その部室で毎日食べているらしい。一緒に食べた事なんか無い。

財布を確認してから教室を後にした。

渡り廊下には食堂へと急ぐ生徒の数々が早歩きで歩いていく。その中で訳我城も紛れて食堂へと入った。食堂で設置された机、椅子に人がぎゅうぎゅうと座って食事をしている。食券販売器に群がる列に訳我城は思わずあっけに取られそうになった。毎回この光景には驚かされる。列の合間を抜けて、購買にあるパンを探す。

僕と同じ考えを持つ生徒達がもう先にパンを購入して残っているのは爆弾オニギリというネーミングの1.5倍近い大きさのオニギリが数種類。それから残っているパンは、一番人気の無いアンパンであった。

適当にオニギリとパンを購入すると、人ごみから抜けて最近お気に入り場所へと向かう。訳我城 答が好む場所とは人が少ない校舎の裏にある大きな木の下である。どうしてその場所には人気がないのかというと1年前、校舎と校舎の間にあった空間をゲーディングして木で出来た椅子と長机を設置して、そっちの方が日当たりもいいし、何より近いその理由でこの大きな木の下には人がいなくなってしまった。

・・・とは言っても、伝説の木下はどうやらまだ健在のようであるに男女の青春が行われている。  
今日もか・・・。

場所に着くと、先人の事に気付く校舎の影に静かに隠れた。聞く耳を経てたつもりではないが、することもないので、二人が去っていくのは待っていた。

今回の相手は鉄壁と有名な鳳葛祇 雅音と雰囲気からわかるほど気持ち悪い男子生徒だった。

「も、もしかしてこの手紙を書いた人？」

「そ、そうだよ！ぼ、僕が書いたんだッ！」

「そうなんだ、手紙ありがとう」

ありがとうとは言っているもののその表情は笑っているようでまるで表面だけのような、訳我城でも理解できた。

「じゃあ、読んでくれたんだねッ!？」

「はい、一応読みましたけど・・・」

「じゃあ、僕と付き合っつてよ。僕とデートして僕と結婚して、僕と子供と君で幸せな日々を過ごそうよ!！」

「ッ!？」

驚きだった。いや、気持ち悪すぎて思わず吐き気が催した。第三者の僕でさえそう思えてしまったのだ。そう言われた本人は一体どのような気持ちなのだろうか？だが、訳我城が考える事以上に鳳葛は冷静で頭を下げた。

「ごめんなさい。私は貴方と付き合う事はできません」

「え、え？ど、どうして？」

「ごめんなさい」

「僕ならきつと雅音を誰よりも愛せる自身があるし、幸せにできる!！」

「ごめんなさい」

瞳孔を開かして、息を荒らげて詰め寄らん勢いの男は今にも殴りそうな勢いだ。

「・・・ふざけるなよ。何が嫌だっというんだッ!！」

・・・これはやばいんじゃないか？と訳我城の脳内に不安が過ぎる。だが訳我城 答は勇者でもないし、小説の主人公のようなものじゃない。彼女がどうなるかと彼にとっては無関係だし、顔を出したくない。ここはそつと離れるべきだ。

### 革命の序章 3

時刻 14 時 14 分 遺体留置所、特別留置室。

町外れの場所にあるなんの変哲もない大きな神殿のような作りの地下、そこは留置出来ないような四肢がない遺体の置かれた慰安室だった。引き出しのように取っ手が沢山あり、その上にナンバープレートに番号が割り振られている。

刑事とこの管理人と笹久間とツツカがカツカツと乾いた音を立てながら、歩いていった。

「・・・俺は初めてこういう場所に来たが・・・これは、お香の香りか？」

「はい、その通りです」

「まあ、遺体を閉じ込めているって言うっても、どうにも匂いがねえ。あ、因みにこれおじさんの提案ね。嘘だけど」

管理人の話を代弁して刑事が答えてみせた。思わず癖で懐のタバコを手に取るうとしたが、場所に気づいて諦める。

「遺体というのは、火葬をしてあげないのでしょうか？」

「確かに用事がなくなれば、彼らには成仏してもらうけど、遺体解剖をしていないし、それまでは仕方ないね」

「成程ねえ・・・で、その例の見せたいものなんだ？日笠刑事」

「おっ！ついにおじさんの名前を読んでくれたねえ、おじさん嬉しいなあ」

「ご年配の愛情をいただいても嬉しくない。これは俺にとってのドリーマーが騒いでいるのさ」

「で、出たねえ意味不明な名ゼリフ」

先陣を切って進む日笠刑事と管理人が日常の話をしている、数メートル距離を開けて、笹久間とツツカは歩く。

「ご主人様、」

歩きながら淡々と口を開いたツツカに笹久間は視線も合わせずに、耳を傾ける。

「今回の被害者である。大鷲 純子様は何故、標的になったのでしょうか？」

「さあね、俺にもさっぱりだ。だが何かしらの小さな接点があったのかも知れないな」

「私は疑問を抱いています」

「何？手短に頼むよ」

「この地域での夢追人は、ご主人様と戦闘と狂気。それから能力にも気づいていない市民達しかおりません。せいぜい5人くらい。それならば能力発動と同時に他の方が気づくのではないのでしょうか？」

「確かに・・・その可能性はある」

重大な話はしながら、足を止めない二人は前と一定の距離を保っている。小さな声で喋るツツカに対して大声で笑い声を上げる日笠刑事。

「戦闘はともかく狂気なら、すぐに気づいて話掛けているだろうね。いや、そもそも狂気か戦闘が敵の可能性もなきにしもあらず」

「疑わるのですか？」

「ハツハツハ、飽くまで可能性の話だ。だがその事は理解しておいてくれツツカ」

「・・・了解」

「・・・着いたぜ」

十字に分かれた道から右に進んで一番奥の引き出しの前に日笠刑事は止まった。そして懐から新品のマスクを取り出して、ツツカと笹久間に手渡した。

「これつけている、結構キツイからな」

きついとは臭いの事だろう。笹久間は文句も言わずにマスクをつけると続くようにツツカも装着した。

ポケットから錫杖のようについた鍵から一つを選んで、引き出しの鍵穴に差し込んで、開けると鍵束を閉まって、管理人は取っ手を握った。

「・・・」

無言で三人を見て、それに答えるように日笠刑事は小さく頷く。

管理人はぐっと力を入れて、引き出しを引っ張った。レールのように敷かれた二本の道を通って、現れた長方形の箱の中には――黒い、人が入れそうなくらいの大きさの袋があった。袋の上部分が少し浮き上がって、下も何かが袋を押し上げている。

後から追いかけてきたもう一人の管理人が担架のようなに車輪がついたものを持ってきて、高さを調整して、その上に箱を乗せた。

「・・・ここで確認しますか？」

「・・・ああ、顔だけでも頼む」

ジジジ・・・と備え付けられたジッパーを上から下へとずらしていき、その顔が露になった。

――顔の原型をとどめていないそれは、瓢箪のように凹凸が激しく皮も向け、ベトベトとした液体を漏らした赤く染まった血管と筋肉が露になっている。目玉はつぶれ、まぶたは無く、鼻は逆に凹んでいる。だが、人間として残った部分、髪の毛だけは一部赤に染まっているものの、無事であった。笹久間は気分がおかしくなるのを実感しながら、年齢を推測した。

――黒という存在を枯れ、白くそまった毛束についた赤色は糊のように毛を纏め、一つの蛇のように姿を変えていた。髪の毛が白い、全て、それは――年齢を老いている証拠だった。

――大鷲 純子。推定年齢・・・50代以上。

「大鷲 純子、夫との二人暮らしで、現在、その夫、大鷲 健二が逃亡している」

「それだと犯人は決定なのでは？」

「どうも、ふに落ちないんだよ。あっさりしすぎてて」

「・・・確かに」

その時、笹久間に一つの物が見えた。

同日16時34分――学校帰路

訳我城 答は考えていた。――後悔したのかどうかだった。あの昼休み、自分の苛立ちをぶつける男にひたすら、謝り続ける鳳葛祇を校舎に隠れてそっと、去ってくれるのを待っていた。

心の中ではいかになくていいのかと考えた時があったが、結局はその場を去ることしかできなかった。

昔、じいちゃんに言われた事がある。考える前に行動しろって。そのじいちゃんはそう言って、道歩くギャルのお尻を撫で回して警察のお世話になっていた。

その時は、絶対にこんなジジイになりたくないって思っていたけど、案外言葉自体はあっているかもしれない。

だが、すでに考えるだけ無駄である。だけど考えてしまうのが訳我城 答である。考えて考えて、結局諦める。それがいつものパターンだった。

訳我城の家は、工場地帯の近くにあり、どうも帰り道は同じ学生はおるか、人がいない。そして、なにより雰囲気は暗い。

訳我城は考えた。そう言えば昼休み以来、鳳葛祇はいなくなってしまった。流石にあれだけ言われたのだ気持ちの悪さで帰るのは理解

の範囲だった。気持ちの悪い男はクラスが違うためあれからどうなったのかは見ていない。

「・・・僕ももしかしたら、何かに憑かれているのだろうか？」

二度目のチャンスだった。訳我城の帰り道にいた。ーー思っていた直後にいた。気持ちの悪い男だ。周囲にキョロキョロと視線を這わして、如何にも怪しかった。思わず近くの物陰に隠れてしまった。・・・これはつけるべきなんだろうか？二度目のチャンスであるし、いや、でもこれはアニメや漫画とは違う。一度間違えたらどうなるかもわからないし、そもそも鳳葛祇と関係があるのかわからない。だけど現在、鳳葛祇の事で異変を起きているのには違いがない。こっそりつけて、関係のないようだったら静かに帰るか。

こうして、訳我城の追跡が始まった。

## 革命の序章 4

笹久間は探偵事務所に戻っていた。ツツカは静かにお茶を注いで、笹久間の元へとお茶を置いた。

「ありがとう、ツツカ」

「いえ、それより答えは出ましたか？」

「わからない。それはこれから結んでみようと思う」

「そうですか」

笹久間は、お茶を一口を含むと深呼吸をした。ツツカはその場で立って、笹久間の動きを見守った。

笹久間の探偵ドリーマーは繋ぐものー結ぶもの。それは断片の回想をパズルのように作り上げていく。笹久間の意識は集中の中に溶け込み、今日起きた事、見たこと、察したこと事件のことを全てパズルとして形成して、完成の形を作り上げる。それが笹久間の能力  
《探偵の基礎》

かちりと合わさると、疲れた表情の笹久間はゆっくりと目を覚ました。

「・・・ツツカ、出かける支度をしろ。犯人の元へ餌を貰いに行こう」

「了解しました。ご主人様」

結局、ついてきてしまった。訳我城 答は結局後悔した。追いかけてようが見過ごそうが、後悔しかなかった。訳我城は実は安心してい

た。何も無いんじゃないかと思っていたからだ。

だが、答えは違っていた。工場の倉庫にて、暗闇の中を歩く男の目的の場所には頬に痣が出来て、晴れ上がっており、椅子に腕を括り付けられていた鳳葛祇がいたからだ。意識は失っており、男は気持ち悪く微笑んで、頬に触れていた。

「・・・君が照れ隠ししていたのは知っていたよ」

「・・・」

「僕が弱気で話したのが、不味かったかな。こうやって強気で行けばよかったよ」

「・・・」

最悪だ。最悪なモノを見てしまった。これは黙って帰っていいのだろうか？だが、僕の予想が正しければ昼休み、僕が離れてから鳳葛祇は、暴行によってここまで連れてこられたのか。これは助けなければならぬのだろうか？

そう訊我城が考えている内に男は鞆を開けて、ごそごそと何かを探し始めた。

「今みたいなこの場所で暮らすのもとても楽しいけど、僕はもっと楽しい場所に行きたいんだよ」

そして、目的の物を取り出した。新聞紙に包まれた柄が突き出したもの。

訊我城の直感が言っている、危険信号が今にも臨界点を突破しそうな位サイレンを鳴らしている。

「この世界じゃ、雅音は本性を出せないんだよね。だから僕が正直になれる世界に連れて行ってあげるよ」

ぐるぐるに巻いた新聞紙をまるで花弁のように一枚一枚剥いて、ようやく姿を現した。

——その瞬間、心臓がどくと大きく鼓動を打った。ぎらりと輝く

それはこんな所では見かけない。人間が食事をするために、料理をするために用いる物。それは包丁。食べやすくするために作られた刃物。台所で見かけると恐怖すらしないものが、台所から出た途端に抑えていた恐怖を放つ危険な物。助けないと。このままじゃ殺されてしまうッ！

「さあ、一つになろう！！雅音ッ！」

「ー駄目だッ！！」

思わず、訳我城が前へと出た。恐怖に身が縛られるより、人が死ぬのはこんな僕だつて見たくないし、助けられるなら助け出してみせたい。だけど、出たのはいいけど打つ手がない。

「誰だッ！？お前ッ！僕と雅音の神聖な儀式を邪魔するなッ！」

相手はかなり戸惑っており、刃物の先をぶんぶんと振り回して、

訳我城に向けた。

刃物の鋭利な輝きを見た途端に、訳我城は背筋にゾツと悪寒を感じ、思わず息を飲んだ。

「お、落ち着いて！！、それに今君がしようとしていることは、犯罪だから」

「うるさいッ！僕と雅音の儀式が犯罪？そんな分けないだろお！！これは僕たちの結婚式なんだよ！！現実に騙されて素の顔を閉ざしてしまったジュリエットを僕が救い出してみせるんだッ！！」

訳我城は刃物に視線を囚われたまま、彼の話に対して恐怖を抱いた。こいつは、おかしいのか？何を考えているんだ？自分がロミオのつもりなのか？

「結婚式の事は二人の事だから、僕には関係ない！けど、両者の合意もなく結婚して、それで幸せになれるのかッ！」

これが訳我城にとって、最大限のフォローであり、理解できる範囲での解答だった。

ーだが、刃物を持つ彼にとってそんなフォローも所詮は、駄弁でしかなかった。

「また、僕をそう言って馬鹿にする・・・僕に蔑んで、噂を立てて、僕の存在を汚物のような視線を向ける・・・」

「いや、僕はそんな事はー」

「ー五月蠅いッ！」

「五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅い五月蠅いッ！！！！！！僕には分かるッ！お前が僕の事を気味悪く見ているのを！！許せないッ！許せないッ！」

ガンガンと地面を暴れる子供のように蹴りながら、刃物を持っていない手で髪を、頭皮を向くように荒くボリボリとがむしゃらに掻き始めた。そして、すっと視線を鳳葛祇 雅音に向けると慈しむような視線で口を開いた。

「でもこの子は違う、この優しいそんなマリアのようなこの子は、僕を包み込んでくれる、正に天使だよ」

ここで、完全に訳我城は認識した。ー彼は、イカレテイルと。

「地上に鎖でつなぎ止められた天使は僕は助けないと、そして僕はその天使に引かれ、最高の幸せを手に入れるんだ」

鳳葛祇の頬をそつと撫でて、こちらには視線をくれない今がチャンスだ。訳我城は一生分の勇気を振り絞って、走り出した。それは学年マラソンのようなゆるいものじゃない。この距離を、訳我城が出せる最大の速度で手に持っている刃物を奪う為に、それだけの為に足の筋肉がちぎれそうな位の本気を出した。

ーそれゆえに、

「ッ！来るなッ！」

訳我城に響いたのはドスっという何か突き刺さる音と、刃物の男の声だった。

「・・・え？」

現状が理解出来ずに、ゆっくりと視界を動かした。まず最初に見えたのは怯える男の顔。そこから視線を下へ向けると刃物の柄だけ

が見え、鋭利な部分は訳我城の腹に消えていた。溢れ出す血液にそつと触れると、徐々に痛覚が目覚めます。

熱い、熱い、燃えるように刺された場所が熱い。だがそれ以上に痛い、自分の体以外の物が体内に入っている事に気持ち悪さを覚え、痛みに思わず涙をこぼしそうになる。

「うわっ!!」

ズボツと抜かれた場所から噴水のように血液が溢れ出す。血の気が失せ、躓いて仰向けで倒れた。手で塞ごうが、血が止まる気配すらない。

「……!!!」

何かを叫んでいるようだが、訳我城の耳には届いていなかった。理解することは訳我城にとって、不可能の領域であった。

## 革命の序章 5

「やっと見つけたぞ、狂気」

廃工場の中、積み上げられた鉄クズの上に狂気と呼ばれた者はいた。それに対して本当に面倒くさそうに笹久間と大きな荷物を背負ったツツカは対峙していた。

「遅かったねエ、探偵とメイドちゃん、おいら待ちくたびれたよ」

「俺もな、探すのに苦労したぜ、御陰で今日の内にツツカのお茶を四杯も飲んじまった」

「いいじゃないツ！可愛いメイドちゃんのお手製のお茶なんて、おいらも飲みたいね、いいかい？」

「残念ですが、その提案は、拒否します」

「あらあら、お堅い・・・探偵クマさんにぞつこんと言うわけね」

「ご主人様の事を侮辱した言い方をするのは、遠慮してもらいたいのですが」

ツツカは背中に背負った大きな荷物を下ろして、素早く中から、それを取り出した。鉄の牙が連なって輪を作った剣、高速で回ると最強の近接武器にもなる。チェーンソー。本来は木を切ったりする用途の物をツツカは軽々構えて、戦闘体制になった。

だが、そんな武器を見ても、狂気は驚きもせず、笑ってみせた。

「流石、魂ソウルの娘だね。決断も速いし、ご主人を優先とは、人間としての感情でも捨てたのかい？メイドちゃん？」

「素より、ご主人様以外に、持ち合わせる感情などないもので」

「そりゃ、すごいね。やつぱり壊れてるわ。おいらにはそんな事は出来ないね。自分一番だし」

「では、ご自身の身もご自身でお守り下さいませ」

ツツカはモーターを回すためにスターターに手を掛けた。が、その手を笹久間は抑えた。

「悪いが、生憎まだ謎を解くまでは、戦う気なんて全くない」

「・・・謎？」

「そうだ、今回起きた御婦人の殺人事件。殺害現場、工場前で煙突に鉄網でくくり付けられて死んだ猟奇的事件だ」

「ああ、そんなニュースもあつたね？あれ解決したの？」

「ああ、この場で解決する」

狂気は暇そうに鉄屑を一つ拾うとポイッと横に投げた。足をぶらぶらと動かして、視線を笹久間に向けた。

「・・・で、おいらが犯人だと思つてわけだ・・・なるほど流石、探偵ドリーマーだね名推理だよ。確かにおいらの狂気を使えば、あんなことも造作もないし、簡単だよな」

「でー、大鷲 零壺『おおわし れいこ』はどこにいる？」

壁に遮られてシルエットだけが見える狂気がぴくりつと止まった。そして、答えた。

「証拠はあるのかい？おいらがその子を知っている確証は？」

「確かに、半分半分だな。だが、狂気熟练操作及び記憶改ざんがこの街で出来るのは今のところ、狂気、お前だけだ。それとあとこれだ」と笹久間はポケットから小さな凹凸が激しい丸い物体を取り出した。

「まだ、解剖はされていなかった時点で見つけたのは幸運だったよ。潰れた顔の奥にあつたからね」

ブローチ。小さな綺麗な綺麗にしたものの未だに傷穴に血がついているブローチ。

「思い出は簡単に消せるもんじゃないんだ。これが証拠だ」

歪んで開けにくくなったブローチを開けると中身を見せた。殻が保護して、形は曲がったものの血が一つも付いていない写真。両親と娘が微笑んで幸せそうな家庭を取った一枚。

「これが決定的な証拠だよ。揺神 恐『ゆがみ おそれ』」

「それはおいらの、決定的なミスだね……。流石探偵ドリーマー、出ておいでよ悪魔」

そう呼ぶと、暗闇の中から揺神の横に並ぶように女子高校生が現れた。

「揺神、お前は他者のドリーマーとの接触、及び同盟関係は禁止のはずだ」

「確かにその通りだけど、おいらだってさみしい時はあるし、今更そんなこと言っても仕方ないと思うよ」

「どういうことだ？」

「これもご自慢の名推理で解いたらって、思ったけど、どうせすぐ分かるし、教えるよ」

揺神はようやく立ち上がって、手を大きく広げた。

「戦争だよ。ドリーマー同士の戦いが起きるんだよ」

「なぜ？」

「それは決まっているよッ！新たな赤子が産み落とされるんだよ」

刺された。訳我城はもう目の前が真っ暗だった。

これから多分、鳳葛祇とイカレた男は死んで、ここで三人死んでしまう。死にたくない。どうしてこんな事をしたのだろう？しなければ、僕は死ななかつた。きっと誰かが助けてくれたのかもしれない。

そもそも警察に行けばよかつたじゃないか。僕はきつと厨二病にかかつていたんだな。もしかしたら救えて、主人公のように輝く事が出来るかもしれないか。

訳我城は心の中で笑ってみせた。その結果がこれか。助けようと

走ったら、無様に返り討ちにあつて、自業自得じゃないか。こんな  
かつこ悪い死にかたは嫌だなあ。もう視界が見えないけど、まだ二  
人は生きているのだろうか？助けられるのだろうか？

いや、僕はどんな状況なんだろうか？きつと血まみれなんだろう。

走馬灯は一瞬で、ビジョンとして通過して、対した思い出もない。  
ここで訳我城は思った。そうだ。もし生まれ変われるのなら、全く  
正反対の主人公のような男になりたいと

それだけだった。それだけで、僕は――俺は立ち上がった。

「「ツ！？」」

その瞬間、ツツカと笹久間は何かを感じ取った。何か凄い気配だ。  
産み落とされたような凄いものが生まれた。

「来たね〜遂に誕生したんだね」

「あの揺神様？これって？」

「ああ、零壺でも分かる？そう、これが戦争の合図だよ」

「どういうことだツ！！？」

「だから、これが戦争の合図だよ。生まれたんだよ。《革命》ドリ  
ーマーが」

「あれは儀式には必要な行為だったんだよ。大丈夫、僕たちはこれ  
で最高に幸せになれるツ！」

自分に言い聞かせるように呟く男に、訳我城が笑いながら答えた。  
「アハハハ、そんな訳ないだろ、人を殺すなんて最低の行為だ」

「ッ!? な、なんで・・・生きてる?」

男が驚くのも分かる。訳我城の足元には致死量に近い血の池が出来ており、それでも平然とピンピンしている訳我城がいる不思議な空間だった。

「そりゃ、俺は不死身だからな。それから、その子は助けさせてもらっぜ」

「う、うわああああああああああああああああああああ」

発狂した男は血で濡れた刃物を両手で握って、訳我城に向かって走ってきた。

「二度も食らうかよッ!」

走ってくる相手に対して、訳我城も走って、飛んで膝で相手の顔面の強打した。

相手が叫ぶ暇もなく、ガッソッ!と大きく音が響き、吹き飛ばされる。

今だ眠る鳳葛祇をお姫様抱っこで抱えると、びっくりともしない男に背を向け、歩きだした。

「お姫様の救出完了」

「ねえ? 感じるでしょこの化物じみた気配、まあ、おいらはこれから会いに行ってくるけど、悪魔、二人相手に出来る?」

「え、でも、まだ使い方とか・・・」

「大丈夫、自分を信じれば、きっと答えてくれるから」

「・・・」

スターターを引いて、モーターに起動させたチェーンソーを構えて、ツツカが一気に揺神に向かって、飛んだ。大きく振りかぶったチェーンソーに大鷲 零壺は揺神を守るように両腕を十字に組んで、守ろうと体勢を取った。

「・・・」

止める気もなく一気に振り下ろしたツツカのチェーンソーはガガガと零壺の腕を削る。ーが。

その皮膚は噛み切られる事なく、無傷でそのチェーンソーを止めていた。

「・・・どうということなのでしょう？」

「私だってよくわからないわよッ！」

ぶんつと吹き飛ばすように零壺が力を入れると、その華奢な見た目とは裏腹に簡単にツツカは吹き飛ばされた。空中で体勢を戻して、すばやく構えるツツカに対して、笹久間は懐から拳銃を取り出して、揺神に狙いを定めて、引き金を引いた。

「普通の人なら死ぬかもしれないけど、それは愚策だよ探偵クマさん」

揺神はぱつとした動作で銃弾をよけて、宙に浮いた。

「それでは皆さん、ごきげんよう」

パツと揺神の姿が消えたと同時に笹久間はまた引き金を工場の天井に向けて、放った。ーするとそこには銃弾を手で受け止めた揺神がいた。

「《名推理》は、敵の行動を予測で高速で答えを導き出す」

「その能力はおいらは嫌いだな」

「お前を接触させはしない。その革命がどれだけの歪みを及ぼすのかは知らないが、狂気の監視役である俺が簡単に接触されると思うか？」

「確かにその通りかもしれないね。仕方ない。少しだけ遊んで上げるよ探偵」

「それはどうも、ありがとう」

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n1318y/>

---

革命ドリーマー

2011年11月20日20時08分発行